

# 山の上の木と雲の話

小川未明

青空文庫



山やまの上うえに、一本ほんの木きが立たつていました。木きはまだこの世よの中なかに生うまれてきてから、なにも見みたことがありません。そんな高いたか山やまですから、人間にんげんも登のぼつてくることもなければ、めつたに獣物けものも上のぼつてくるようなこともなかつたのです。

ただ、毎まい日にち聞きくものは、風かぜの音おとばかりでありました。木きはべつに話はなしをするものもなければ、また心こころをなぐさめてくれるものもなく、朝あさから夜よるまで、さびしくその山やまの上うえに立たつていました。同おなじ木きでも、にぎやかな都と会かいの中なかにある公こう園えんにあつたならば、毎まい日にち、いろいろな物ものを見み、またいろいろな音おとを聞きいたであります。しかし、この木きはそんなことがなかつたのであります。

よる  
夜になると、遠くで獣物のほえる声と、永久に黙って冷たく  
かがやほしひかり  
輝く星の光と、いずこへともなく駆けてゆく、無情の風の音  
を聞いたばかりであります。

しかし、この木にただ一度忘れがたい思い出があるのでありま  
した。それは、ある年の夏の夕暮れ方のことであります。あんな  
うつく  
に美しい雲を見たことがありません。その雲は、じつに美しい雲  
でした。にこやかに笑っていました。体には、紅・紫・黄・金・  
ぎん  
銀、あらゆるまばゆいほどの華やかな色彩で織られた着物をま  
とっていました。髪は、長く、黄金色の波のようにまき上がつ  
ていました。その雲は、おそらく大空の年若い女王でありま  
したでしょう。ゆうゆうと空を漂って、この山を過ぎるのでした。

木は、魂まで、ぼんやりとして、ただ夢心地になつて、空を見上げていました。

「なんとという美しい雲だろう。あんな美しい姿のものが、この宇宙にはすんでいるのだろうか？」

と、木は思つて、ながめていました。

すると、その雲は、ちょうど木の立っている山の上にさしかかりました。木は、見上げれば、見上げるほど美しいので、気も遠くなるばかりでした。このとき、ちようど、鈴を振るような、やさしい声をして、雲は下を見て、

「ああ、まっすぐない木だこと。風にも、雪にも折れないで、よく育ちましたね。ほんとうに強い、雄々しい若い木ですこと。

どんなにこの山やまの上うえに一人ひとりで立たっているのではさびしいでしょうね。しかし、忍にんたい耐たいをしなければなりません。わたしは、また、きつと、もう一度どここへやってきますよ。それまでは、達たっしや者しゃでいてください。いろいろのおもしろい話はなしや、珍めづらしいこの世界せかいじゅうでわたしの見みてきた話はなしをしてあげますよ。」と、木きに向むかつて雲くもはいいました。

木きは、ほんとうに夢ゆめとばかり思おもったのです。そして、このときばかりは、自分じぶんほど、幸こうふく福ふくなものは世よの中なかにないと思おもいました。いつまでも木きは、この美うつくしい雲くもをば見みていたかっただけです。また、翼つばさがあつたら、自分じぶんも飛とんで雲くもの後あとを追おつて、いっしょに旅たびをしたいと思おもいました。しかし、木きには、もとよりそれができなかつ



木が、こうして悲しみに沈んでいましたとき、からすがやってきて、

「なんで、そんなに悲しんでいるのですか？」と、木に向かつて聞いたのであります。

木は、心の中の悲しみを隠していることができませんでした。

そして、からすが、さもしんせつにいつてくれましたので、木はくもはなし雲の話をして、

「おまえさんは、羽があつて、遠いところまで旅をなさるから、もし、その雲をごろんになったら、私に教えてください。」と、木はからすに向かつて頼みました。すると、からすは、

「そうです。私は、海の方へも飛んでゆきます。また広い野原へ

も、ときには、村へも飛んでゆきます。けれど、このごろはどこへいっても、これと同じ曇った空色で、かつてそんな美しい雲を見たことはありません。私も気をつけていますが、もしつぐみ  
がここにきましたら、よく聞いてごらんなさい。あの鳥は、諸  
国を飛びまわりますから……。」と、木に向かっていた。  
哀れな木立は、さも頼りなさそうに見えました。からすは、や  
がて別れを告げて去ってしまいました。それから幾日もたった  
冬のはじめです。つぐみが、どこからかやってきて、この木の枝  
に止まりました。木は、からすのいったことを忘れずに、さつそ  
く雲の話をしました。

「つぐみさん、どこかでこんなような雲をごらんになりましたか

？」と、木は、鳥に向かつて聞きました。

敏捷 そうなつぐみは、小さくびをかしげながら、考えて

いましたが、

「あ、見ましたよ。それは、ここからは、たいそう遠いところであります。海を越えて、あちらのにぎやかな都会であります。ある日の晩方、私は、その都会の空を、急いでこつちに向かつて旅をしていますと、ちょうどあなたのおつしやる美しい雲が、都会の空に浮かんでいました。下には、とがった塔や、高い建物などが重なり合つて、馬車や、自転車などが往來の上を走っていました。そして、街の中は、たそがれかかつて、燈火が、ちらちらと水玉のようにひらめいていました。」と、つぐ

みはいいました。

これを聞いていた木立は、深いため息をもらしました。

「いまは、そんなに遠いところに、雲はいつてしまったのですか。」と、木は、さびしさにたえられなかつたけれど、雲の無事なのを聞いて安心いたしました。

「どうか、また、その雲をごらんになったら、私のことをよく告げてください。」と、木は、つぐみに頼みました。

「きつと、あなたのことを雲に告げますよ。私は、もう明日はここを去つて、遠くへゆきますから、また、どこかで、あの雲を見ますでしょう。」と、つぐみはいいました。

木は、またこのつぐみとも別れなければなりませんでした。こ

うして、さびしく山やまの上うえに一人ひとりいつまでも残のこされたのであります。  
それから毎日まいにち、情つれない風かぜは木きを揺ゆすりました。雪ゆきは、舞まつ  
てきて枝えだにかかりました。そして、明あけても暮くれても、灰はい色いろの  
雲くもは、頭あたまの上うえをゆきました。  
いつになったら、木きは、あうつくしい雲くもの姿すがたを見みるでありますよ  
う。また、夏なつがめぐつてくるには、長ながい間まがあつたのです。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「読売新聞」

1922（大正11）年3月22～25日

※表題は底本では、「山《やま》の上《うえ》の木《き》と雲《くも》の話《はなし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山の上の木と雲の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>